「私が、ここにいる」

ヨハネによる福音書 4 章 1～26 節

御存じの方はおられるでしょうか。あるところで、昔 流行したという歌謡曲のこんな歌詞を目にしました。「日暮れになると淋しくなるのよ／なにがなんだか分からなくなるのよ」。忙しく立ち動いている昼の間は忘れているものの、一日の終わりに自分独りの時に戻ると、夕暮れのもの寂しい光景も相まって、なんともやりきれない思いに襲われる。そんな空虚で寂しく虚しい溜め息が聞こえてくるような歌です。自分はいったい、なんで、ここにこうしているのか。何のために・・・？ それが分からなくなる。そんな独りぼっちの寄る辺なさであり、儚さ、虚しさと言ったらいいでしょうか。

日本は戦後、経済面で先進国と言われるまでに発展を遂げましたが、その一方で皮肉にも、自殺の先進国として知られるようにもなりました。経済的に豊かになり、物に満ち足りるようになっても、私たちは依然として、どこかで満たされずにいる。もしかすると、先々 福祉が充実し、老後の心配がなくなっても、それはなお消えずに残るのかもしれません。

電話カウンセリングの代表的なものに「いのちの電話」というネットワークがあることは広く知られていますが、そこでも事は同じようです。いつでもどこからでもかけられ、名前を知られずに一対一で話せるという電話の特性を生かして様々な相談にのっていますが、そのいのちの電話でも 1971 年の創設以来、自殺関連の電話が鳴り続けているといいます。多くは、深夜、独り静まった時にかかってくる。そして、そこには共通した叫びがあると報告されています。「孤独に耐えられない」「生きていても意味がない」「死にたい」「死ぬほかない」といった呻きです。つまり、生きていてもうれしくない、喜びや充実感がない、納得できるもの・満たされるものがない、生きる意味が分からない、自分を支えてくれる確かなものがない、ということなのでしょう。人は群れて集まっていますし、物も刺激も情報も満ち満ちています。けれども、私たちはどこかに何かを置き忘れ、心の内を木枯らしが寒々しく吹き抜けているのかもしれません。そして、それはもしかすると、人生の根っこを支える確かな拠りどころがおぼつかないところから来ているのかもしれない、と そんなふうにも思わされています。

そもそも、信仰とは神ならぬ自然や人間を祭って、それらを宥めたり賺したりすることではないでしょう。それは信仰心ではあるかもしれませんが、本来の信仰のあり方ではないように思います。信仰とはまた、本質的には、なにがしかの供え物を捧げて、家内安全や商売繁盛を祈願することでもないように思います。自分の利益のために神を利用したり、仕えさせたりすることではないはずだからです。そうでなく、それはまずもって、私たちの足もとを支える確かな拠りどころをたずね求め、そこから真のいのちを頂いて、生きるべき道に生かされることではないでしょうか。私たちはその

ような信仰に目を凝らすように、そして そこで喜びのうちに生かされるようにと求められ、また励まされているように思います。

聖書は、神が人を追い求め、その愛のうちにこれを捉(とら)えて慈しみ育んだ記録、と言えるのではないでしょうか。それはまた、逆の言い方をすれば、人が真(まこと)の神に出会って本物の信仰に目を開かれ、そこで豊かないのちに生かされていった記録、とも言えるように思います。今回登場するサマリアの女は、そうした出会いを経験した、ことさら恵まれた女性でした。

当時、パレスチナは 3 つの地域に分かれていました。聖書地図を御参照いただければ分かりやすいかと思います（『新共同訳聖書』収録のそれでは、「6 新約時代のパレスチナ」)。北のガリラヤ、南のユダヤ、そして その中間のサマリアです。時にイエス・キリストは、ユダヤ教の当局者・ファリサイ派とのゴタゴタにこの段階で巻き込まれるのを避けるため、ユダヤ地方を去って、ガリラヤの地に向かわれます。ヨハネ福音書は 1 節で、「**イエスがヨハネよりも多くの弟子をつくり、洗礼(バプテスマ)を授けておられるということが、ファリサイ派の人々の耳に入った**」からであると、その理由を記しています。ですが、ここで奇異に感じられるのは、「**しかし、サマリアを通らねばならなかった**」という 4 節の記述です。なぜなら、当時、ユダヤ人がユダヤからガリラヤに向かうとき、あるいはその逆に ガリラヤからユダヤに向かうとき、よほどのことがないかぎり、サマリアを通っていくことはなかったからです。どちらの場合も、一度 ヨルダン川の向こう側に出て、川伝いにサマリアを避けて進み、再びヨルダン川を横切り戻って、目的の地に入るのが普通でした。真っすぐ直進して サマリアを通っていけば、半分の道のりでした。が しかし、ユダヤ人は、倍の道のりを行っても、サマリアを通ろうとはしませんでした。歴史的な経緯(いきさつ)から、サマリア人(じん)とは可能なかぎり関わらないのがしきたりになっていたからです。

歴史的な経緯(いきさつ)とは、こうでした。紀元前 720 年頃、サマリア地方はアッシリア帝国に征服されます。このとき、侵入してきた異民族との雑婚が始まりました。これが、ユダヤ人とサマリア人(じん)との反目の始まりでした。人種的な純粋性を失うことを、ユダヤ人は赦(ゆる)されない罪と考えていたからです。厳格なユダヤ教の家庭では 今日(こんにち)でも、子どもが外国人と結婚した場合、彼らの葬儀を執り行なうところがあると言われます。続いて、今度は、ユダヤ地方がバビロニア帝国に征服されたときでした。ユダヤ人は、人種の純粋性を頑強に守り通しました。このことが、ユダヤ人の優越感をいっそう強いものにしました。そして、決定的なことが起こります。バビロニアからペルシア帝国の治世に時代が変わり、捕囚(ほしゅう)から帰還を許されたユダヤ人が破壊されたエルサレムの神殿を再建し始めたときです。これを知ったサマリア人が支援を申し出ました。ところが、ユダヤ人はこの申し出を無下(むげ)にも拒絶したのです。サマリア人の反感がつのります。こうして、両者の反目はついに、争いに発展。これを引き金に、サマリア人は、サマリア地方の中心にあるゲリジム山に自分たちの神殿を建設します。そして最後は、紀元前 129 年、ユダヤ人がこの神殿を破壊して、両者の憎しみは頂点に達したのでした。このような歴史を背景に持つ両者の関係からして、どんなに時間がかかっても、サマリアだけ

は通りたくない。サマリア人とは関わりたくない。それが、ユダヤ人としてのしきたりだったのです。

つまり、イエス・キリストはそのしきたりを破ってまでして、サマリアに足を踏み入れられたということです。それにしても、なぜなのでしょう。ユダヤの当局者との対立を避けたいといっても、時期はいまだ、宣教の初期の段階です。タブーのサマリアを通ってまでして 緊急避難せねばならない情況にあったとは思われません。加えて、少し先の 40 節を見ると、「**イエスは、二日間 そこに滞在された**」と記されています。サマリア人たちの求めに応じて、主イエスは彼らのもとに 2 日間も留まっておられるのです。要するに、イエス・キリストは人々の顰蹙を買って非難されるのを承知のうえで、それでもあえて意図してしきたりを破って、サマリアに入られたのではないでしょうか。「**サマリアを通らねばならなかった**」とある、その「**ねばならなかった**」に、主イエスの深く熱い思いが隠されているように思われます。それは、隔てや差別に縛られることなく すべての人に恵みの音信を告げることであり、絶望と苦悩の淵から希望と喜びの場所に私たちを招き入れることです。

イエス・キリストが「**ヤコブの井戸**」に着かれたのは、昼の 12 時頃でした (6 節)。弟子たちは食べ物を買いに、町に出かけました (8 節)。暑い陽射しのなか、荒れた石ころ道を何キロも歩いてきました。喉が渇いていました。と そこに、一人の女が水甕を頭に載せて、水を汲みにやってきます (7、28 節)。考えてみれば、異様な光景です。女性が井戸に水を汲みにきたのが、ではありません。昼の 12 時頃という、その時間がです。実際、辺りには、ほかに一人の女性もいません。パレスチナでは、夕暮れ時の涼しい時を見計らって水汲みに出るのが普通だからです。誰が好き好んで、暑い昼日中から、汗をダクダク流して、重労働の水汲みや水運びをするでしょうか。なのに、この女性は、その誰も来ない真っ昼間にやってきたのです。井戸は、5 節、6 節を見ると、「**ヤコブの井戸**」と呼ばれ、サマリアの町のシカルにあったと記されています。正確にはシカルの郊外、1 キロほどの所に位置していたことが分かっていますが、いずれにせよ、シカルは町ですから、当然のこと、そこにも水汲み場があったはずです。にもかかわらず、わざわざ 1 キロも離れた所にまで、水を汲みに来ている。これまた、尋常ではありません。それもこれも、女性の身の上を物語っているのでしょう。おそらくは、道徳的に人々から爪弾きにされて、町の水汲み場を使わせてもらえなかったのだろうと考えられています。そして、町外れの井戸にやってきても、そこでもなお、人々に姿を見られるのが嫌だった。服装や身のこなしも、もしかすると、普通の女性とは違っていたのかもしれません。

主イエスは、しかし、そんな女性に御自分のほうから声をかけられます。7 節です。「**水を飲ませてください**」。すると、女性は答えます。9 節、「**ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか**」。そこには、意地の悪い反感が感じ取れないでしょうか。「**あんたたちユダヤ人は日ごろから、汚れていると言って、私たちを軽蔑して、口もきかない。なのに、自分たちが困れば、女の私にさえ 頼み事をする。そんなユダヤ人に、水なんかやれるもんかね**」。そんな口ぶりです。それは、直後に「**ユダヤ**

人はサマリア人とは交際しないからである」と背景の説明が加えられていることからも推察できますが、ここには単にそれだけでなく、日本語訳の字面以上の意味が隠されてもいるようです。すなわち、単に「つき合わない」「接触しない」という以上の意味合いです。実際、接触云々というのであれば、弟子たちは現に、町に買い物に行っています。サマリア人と接触をして、取り引きをしています。ですから、そこには単なるつき合い以上の意味があるはずです。それは、「交際する」に当たる原語のギリシア語（*συγχρῶνται*＜*συγχράομαι*）から読み取れることとして「(持ち物を)共用する」ということであり、ここではつまりは「そういうことはしない」ということです。すなわち、サマリアの女性の水飲み道具は使わない、ということになります。当時、旅に出る人はどこででも水が飲めるように、動物の皮で作った釣瓶を携帯していました。水を汲むために井戸の中に降ろす水汲み道具です。しかし、主イエスはそれを持っておられなかった。弟子たちが持っていってしまったのかもしれません。とすれば、女性の持っているものを使わなければなりません。けれども、それはユダヤ人にとっては 通常、サマリア人と同様に汚れることを意味していました。サマリアの女性は、ユダヤ人はそんなことは決してしない、と知っていました。が しかし、主イエスは違っておられた。主イエスは、それさえなさろうとされたのでした。

それだけではありません。相手は女性です。あるユダヤ教の教師はこんなふうにさえ言っています。「知恵ある者は言っている。『女と多くを語る者は、その身に災いを招く。律法の学びを軽んじ、ついには地獄に堕ちる』」。公の場で女性と話しているのを見られると、それはユダヤ教の教師にとって、時に名声の失墜を意味することもあったといいます。女性は男性に劣っていると そう考えられていた時代であり、差別と偏見が当然のこととして、社会に浸透していた時代です。しかも、今回の女性はただの女性ではないらしい。いわゆる札付きの女性だったとしたら・・・。それらのすべてを承知のうえで、しかしイエス・キリストは それでもなお、サマリアの女性に御自分のほうから話しかけられたのでした。

何から何まで、異例尽くしのことです。社会のしきたりからはみ出ています。「あなたの内には、敵意というものがないのですか。言葉を交わすことすらしない私たちサマリア人に対する敵意はないのですか」「女を低く見て軽蔑する、女性に対する優越感はないのですか」「しかも、私は身をもち崩した札付きの女です。汚れているとお思いにはならないのですか」。サマリアの女性は、心のどこかでそう感じ始めていたのではないでしょうか。「あなたはどうして、こんな私にも声をかけられるのですか。あれもこれも、なぜ、社会のしきたりを乗り越えられるのですか。どうして、何の囚われもなく、そんなに自由でいられるのですか」。そう問い始めていたのではないかと思わされます。

主イエスの内にあるのは、私たち一人ひとりを大切な人として愛おしむ、その思いだけなのでしょう。その思いが、いのちに貧しいあらゆるしきたりを乗り越えさせるのだろうと思います。そして、一人ひとりを追い求めさせるのではないでしょうか。主イエスは、サマリアの女性に言われます。

10 節、「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう」。乾き切って、ヒビ割ればかりになってしまった女性の心。その荒んだ様を感じ取られたイエス・キリストの悲しみの言葉、また慈しみの言葉のように、私には響きます。

しかし、サマリアの女性の歪んだ応答は、これでもまだ終わりません。主イエスの言葉を「偉そうに」と、反発しながら聞いたのでしょう。女性の応答には依然、どこか嘲りをも感じさせる、敵意の臭いがしないでしょうか。女性は答えます。11 節、12 節、「あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか」。当時、パレスチナでは、川などの流れる水や泉などから湧き出る水を「生きた水」と呼んでいました。それは、良い水を意味していました。ヤコブの井戸は泉ではなく、地中から滲み出る井戸でしたが、女性はつまりは、こう言い返しているわけです。「私たちの偉大な父祖ヤコブは、こんなにも深く、こんなにも水の量の豊かな井戸を掘って、私たちに残してくれました。あなたは、これよりももっと豊かで良い、新鮮な水の湧き出る泉をくれるとおっしゃるのですか。あなたはヤコブよりも偉大だと言われるのですか」。ちなみに、ヤコブの井戸は、その深さが 30 メートル以上もあったと言われています。

28 年ほど前に出た本に、『心の処方箋』という本があります。河合 隼雄さん（すでに故人）という 日本を代表する精神分析の専門家が書かれたものですが、その『心の処方箋』は初っ端から、こう始ります。「人の心など 分かるはずはない」。また 途中、「命懸けで向かわなければ、相手は理解できない」と記すところも出てきます。私たちは、人の心が分かる、人の気持ちが分かる、と簡単に言いすぎてはいないでしょうか。カウンセリングの古典的な議論に、「泥棒の心を理解するには、実際に泥棒をしてみなければならないか」という議論があります。もちろん、泥棒云々には倫理的な問題が関わってきますので、単純に「なら、してみよう」というわけにいかないのは当然です。議論のポイントは、相手と同じ体験をしなくても 相手を理解できるか、ということです。そして、カウンセリングでは通常、現実に同じ体験をしなくても、感情移入（empathy）をすれば理解できると教えます。つまり、感情を相手に移し入れて、相手の気持ちになってみれば、ということです。たしかに、人と全く同じ体験をすることなど そもそもできることではないわけで、その意味では そう言わざるをえない面があるのも事実です。ですが、あえて申し上げるなら、泥棒の心を理解するには、本当はやはり、実際に泥棒をしてみなければ分からない。人の心を完全に理解するなど、そもそもできることではない。もし いくらかでも人の心の深みに触れられるとすれば、それはたしかに 命懸けで相手に向かったときでしかない、と思わされています。実のところ、同じ体験をしなくても 感情を移入すれば理解できる、とカウンセリングが教えるのも、厳密には あるところまでは理解できる、という意味にほかなりません。

もう何十年になるでしょうか。いわゆるカウンセリングブームと言われる時期が到来し、その後現在に至るまで、その種の働きが広がり続けています。必要なことであり、歓迎すべきことです。ただ、それは裏を返せば、自分の周囲に深みの語り合いがない、真実の関わり合いがない、ということでもあるのではないか。そんなふうにも感じます。実際、人が人を知りうる深さは知れています。理解しうる深さ、分かりうる深さは知れたものです。命懸けとは聞こえはいいものの、本当のところ、私たちにはそうそうできることではないでしょう。イエス・キリストがそんな私たちと違っているその違いの一つとはまさにそこにあるのではないか、とも思わされています。なぜなら、主イエスは怯(ひる)まないからです。引き下がりません。あくまでも迫ってこられます。それはついには、十字架上に自分を投げ出してまで私たちを追い求め、私たちに関わろうとされるところにまで至るのですが、主イエスとは実に、この私たちのためにそのような深さにまで生きてくださったお方なのではないでしょうか。

サマリアの女性は、なかなか心を開きません。反発し、突っかかり、悪態をついて、主イエスに真っすぐ向き合いません。普通なら、腹を立て、愛想(あいそ)を尽かして、終わりでしょう。けれども、イエス・キリストは関わることを止(や)められません。なおも追い求め続けられます。「**この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る**」と、13 節、14 節でそう告げられます。真(まこと)のいのちへと女性を招く、招きの言葉です。が 女性は、ここに至ってもまだ分かりません。主イエスの言葉を水汲(みずく)み仕事の上(うわ)っ面(つら)でしか理解せず、こんなふうに言います。15 節、「**主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください**」。なんとも情けないほどの鈍さではないでしょうか。主イエスがここで言われている水とは 言うまでもなく、生活の飲み水ではなく「心の水」であり、「精神の水」「魂の水」です。生活のそれは、いずれにしても、これからもずっと 井戸から汲み続けなければならないものです。女性はそれが分からず、飲み水の水だと、まだ思い込んでいます。しかし 実は、この願いの言葉の裏に彼女の本心が見え隠れしている、と そうは思われないでしょうか。彼女が何より恐れていたのは、いわゆる真っ当な暮らしをしている良識ある家庭の主婦たちの目だったと考えられるからです。水汲みのとき、彼らの目に触れるのが怖かった。だから、夕暮れ時を避けて、昼の日中(ひなか)に来ていたのでしょう。だから、もう汲みにこなくてもいい、いつも湧き出ている泉が欲しかったのだろうと思います。女性はこのようにして、思いがけず、自分の本心を曝(さら)け出してしまいました。

私たちは、実際のところ、本当の自分がよくは分かっていないのかもしれません。本当の自分というのは はたして、どんなものなのか。自分が真実 必要として求めているものは いったい、何なのか。分かっている人はそう多くないのかもしれません。とはいえ やはり、自分というものが多少なりとも分からなくてはそれなりの人生を歩むことはできないように思います。サマリアの女性は、自分がどんな自分なのか、何が失われ 何が欠けているのか、何を真実 必要として求めているのか、それらを自分でも見ないようにして押し殺し、意識の下に閉じ込めていたのではないでしょうか。彼女

を崩れた生活に落とし込んだのは、愛の不毛がその大きな理由だったのかもしれません。18 節に記されているように、彼女には 5 人の夫がいたが、そのすべてに失敗し、今また 6 人目の男と同棲している。愛に胸を膨らまし、期待を抱き、そして 裏切られ続けた。彼女のほうにも落ち度はあったことでしょう。一方的なことというのはそうあることではありませんから。が いずれにせよ、夫から夫へ、男から男へと渡り歩く間に、彼女にはもう、心から信じられるものが、真実と呼べるものがなくなってしまったのではないか。そんなふうに思われてなりません。となれば 当然ながら、彼女自身の人間らしさも薄れていくほかないのではないでしょうか。

イエス・キリストはここに至って、サマリアの女性が何よりも直視せねばならなかった その点に彼女を導き入れられます。主イエスは言われます。16 節、「**行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい**」。そして 女性は、いかんともしがたい自身の現実に向き合わされます。より本質的に言うなら、サマリアの女性は自分自身に出会わされたと言えるでしょう。現実から目を逸らしている間は先に進むことはできず、自らの姿を誤魔化しなく知ること、そこから事が始まるように思わされています。サマリアの女性をそのところへと導かれた主イエスの言葉には、実際、彼女に対する深い愛が込められているように感じられます。

私たちはサマリアの女性を「**なんとふしだらな女か**」と済ますことができるでしょうか。身をもち崩し、男から男へと渡り歩き、崩れた生活をおくる。たしかに、見える現実としては、私たちはそんな生活はしていません。けれども、サマリアの女性の本当の問題は何だったのでしょうか。人と人との関わりの中で信じられるものを探し求めた。真実なものを探し求めた。それこそが、彼女の飢え渇いていたものだったのではないか。そう思われてなりません。もしそうだとしたら、この私たちとどこが違うのでしょうか。私たちのほうこそ むしろ、そうした大切なことにどこか白けてしまっているのではないか。白けて、期待をどこかに置き忘れてしまったのではないか。サマリアの女性は、ただ少しだけ、ナイーブに過ぎたのかもしれない。繊細に過ぎたのかもしれない。純真であればあるほど、人は大きく崩れるから。私には、そんなふうに感じられてならないのです。

こうして サマリアの女性は、引き続く「礼拝をめぐる問答」の後、目の前のイエス・キリストこそ 探し求めていたお方であることに目を開かれます。礼拝をめぐる問答については次回 扱うことにしますが、サマリアの女性が出会ったのは、悪態にも皮肉にも怯まない、反発にも怯まないお方でした。深く熱いものをもって、自分に迫ってくる。自分の真心へとひたすら訴えかけてくる。そのようにして、放り出すことなく追い求め続けてくださる。サマリアの女性はきっと、そんな人間にそれまで会ったことがなかったのでしょう。そのお方に 21 節で「**わたしを信じなさい**」と言われ、26 節で「〔**あなたが待っている、キリストと言われる救い主**〕 **それは、あなたと話しているこのわたしである**」と言われたとき、彼女は人間を超えたなにがしかに、すなわち単なる人間以上の存在に触れて、出会ったのでした。うれしくてじっとしていられない彼女は今月の箇所の直後、29 節で、町の人々に向かって叫びます。「**さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません**」。

サマリアの女性もまた、主イエスにとって間違いなく、他の誰とも代えることのできない かけがえのない一人だったと言えるでしょう。

フランスの哲学者で、信仰者でもあった かの有名なパスカルは、次のように述べています。

自己の悲惨を知らずに神を知ることは、傲慢を生む。
神を知らずに自己の悲惨を知ることは、絶望を生む。
イエス・キリストを知ることは中間をなす。というのも、われわれはそこに神と われわれの悲惨とを見いだすからである。

自(みずか)らの破れや至らなさに真実 涙しない信仰者は、傲慢に陥る。逆に、自分のダメさしか知らず、救いの神の存在に気づかずにいる人間は、絶望に陥る。そんななか、イエス・キリストを知る者は自身の罪に泣きつつ、同時に恵みの神の存在をも教えられて、そこに救いを与えられる、というのです。パスカル自身の信仰の告白と言えるでしょう。

サマリアの女はこうして、主イエスの慈しみに包まれることにより、裸の自分を見せられるとともに、しかし同時に、自分が真実 必要として求めているものは何なのか、そしてそれがどこから来るのかをも知らされたのでした。イエス・キリストの内に恵みの神様の存在を感じ取った。そう言えるのではないでしょうか。

主イエスは 3 章後(あと)の 7 章で、重ねて言われます。「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は・・・その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」(7：37～38)。信じる者に神の聖霊が臨む、と約束されたのでした。つまり、復活の主イエス御自身が生ける主として内に伴い、私たちと共に生きてくださる、という約束です。

人生は単純ではありません。簡単な処方箋 1 枚で何から何まですべて解決できるようなものではないでしょう。しかし、これだけはやはり、間違いないように思われます。飲んでも結局 渇くような、移ろいゆき消えゆくものにいくら心を向けても、私たちの飢えや渇きは止(や)まない。そうした心もとないものではなく、揺るぐことのない もっと確かでもっと尽きないものに目を向けなければ、私たちはいつまで経っても同じところをグルグル回りするしかないのではないか、ということです。イエス・キリストの下さる「生きた水」とは、そのグルグル回りにストップをかけてくれるもの、どこか澱(よど)みを抱えた私たちを より生気のある自分にしてくれるもの、そのようなものだろうと思います。

終わりに、冒頭で触れた「いのちの電話」での出来事を御紹介しましょう。関連の本に記されていたものですが、夜の電話奉仕に当たられたある牧師の報告です。

朝、担当が終わって家に帰る前に、一緒に仕事をした人と昨夜の電話についてよく話

しあいます。

ある時 ある婦人の担当員が・・・〔話してくれました〕。

「昨夜、十二時過ぎ 自殺の予告電話がありました。その人は 自分は孤独だ、誰も信じられない、誰も友もない。わたしはこの孤独に耐えられない、死ぬ外ないと訴えるのです。わたしはよくお話をきいて、いろいろとお話ししたのですが、その方は、自分は孤独だ、ひとりだと言って、そこから一歩も出ようとしないのです。

話をしているうちに どんなに話しても、わたしは孤独だと言うその人の言葉に わたしは悲しくなりました。そしてとうとう わたしは大きな声で、『わたしがここにいるじゃぁありませんか』と言いました。その時、わたしは泣いていたと思います。

すると、相手は、びっくりしたように沈黙しました。そして しばらくそのままでした。やがて話が始まった時、話の調子は変わっていました。もう わたしは孤独だとは申しません。暫(しばら)く話しましたが、自殺は思いとどまったようでした」

・・・わたしは その話をきいて感動しました。この方は、長く信仰生活をしているキリスト者でした。

「私が、ここにいる」。これこそ、イエス・キリストがサマリアの女性に差し出されたメッセージであり、慈しみの神様が主イエスにおいて この私たちに語り続けてくださっているメッセージではないでしょうか。人には理解しえない、入り込めない深みに、主イエスが立ってくださる。そこまでしてくださる主イエスに真実 自分を開くことができたら、と思います。十字架の上にまで その身を投げ出してくださったお方です。私たちが命懸けにならなくても、向こうからすでに、命懸けで私たちのもとに来てくださっている。その主イエスに、ただ素直に 心を開き続ければいい。そう気づかされること。それが信仰の初めであり、またゴールでもあるように思います。「私がここにいるではないか」と、主イエスがそうおっしゃってくださっているのですから。

〔祈り〕

愛する神様。

あなたは、一羽のスズメさえお忘れになることはないとおっしゃってくださいました。私たちはそのスズメよりはるかに尊(とうと)いともおっしゃってくださいました。(ルカ 12：6～7) あなたのそのお言葉が真実なものであることを、身をもって、目に見える形でお示しくださった御子(みこ)イエス・キリストを感謝いたします。

あなたが今このときも私たちの内に臨んでくださり、私たちの思いを導いてくださっていることを信じて、感謝をいたします。どうか、そのことにいつも気づかせ、私たちが立つべきところにしっかりと立って、あなたの下さる「生きたいのちの水」を頂き続けることができるようにしてください。そして、あなたの下さるその生ける水を広く共に分かち合うことができるよう、私たちの思いを豊かで大きなものとしてくださいますように。

感謝し、主の御名(みな)によって願い、お祈りいたします。

アーメン